



海水浴客のいなくなった日暮れ間近の浜辺で、俺は一人ビーチチェアの上で仰向けになって空を見上げていた。

ここは海ではない。大きな湖である。だから“海水浴”は厳密には間違っているかもしれない。

だけど、はるか遠くの対岸は目視では確認出来ず、潮の香りも絶え間なく打ち寄せる波もなんら海と変わりはない。

俺はとても人恋しい気分だった。それでもたった一人でこのビーチにやってきたのは自分の意思だ。一人でいたいはずなのに寂しくなってしまう。この妙な矛盾が存在するのは別に俺に限ったことではないと思う。

このビーチは俺の自宅から車で約1時間の場所にある。去年は何度か友人たちと遊びに来た。

しかし7月に入り海水浴が解禁になって間もない今日、俺はたったひとりでこの浜辺にやってきた。

日が来れ、俺は薄暗いオレンジ色の空を眺めながら言葉にならない人恋しさに打ちひしがれていた。

暮れていく空を眺めているのに退屈したので、俺は椅子から立ち上がって波の低い海辺に向かった。

ビーチにやってきたのは三時間前。はじめから泳ぐ気はなかった。

海辺に歩いて行ったのも泳ぐためではない。波に何かプカプカ浮かぶものが目に入ったからだ。

まだ完全には夜になりきっていなかったなので、ある程度まで近づくとそれが2リットルくらいの大きなペットボトルだと分かった。

水に足をほとんどつけなくても取れる距離にある。

俺は打ち寄せる波に乗ってペットボトルがすぐそばに来たところを見計らい、手を伸ばして掴んだ。

“浜辺にペットボトル”

別にあってもなんら不思議ではないものだ。いくら綺麗な浜辺と言っても、ゴミがないはずがない。

しかしわざわざ俺がそれを拾い上げたのはゴミ拾いのボランティアではない。

中に何か光るものが入っているのが見えたからだ。

そのペットボトルはパッケージがはぎ取られており透明だった。

手に取って見ると、中には綺麗なネックレスと三つ折りにされた紙が入っていた。

まだかすかに残る太陽の残光を頼りに目を細めて見ると、紙にたくさん文字が書かれているのが分かった。

「手紙か・・・??」

既に文字が読めるほどは明るくなかったので、俺はビーチチェアを折りたたんで車内に戻り、手紙の内容を確認した。

———体験版はここまでです———